

日本戦没学生思想(上)：『新版・きけわだつみのこえ』の致命的欠陥について

岡田, 裕之 / OKADA, Hiroyuki

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

578

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

35

(発行年 / Year)

2007-01-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003304>

日本戦没学生思想（上）

——『新版・きけわだつみのこえ』の致命的欠陥について

岡田 裕之

I 佐々木八郎の思想

- 1 日本戦没学生思想の研究：大貫『桜』から『精神誌』へ
- 2 “新しきエトス”とは何か。『青春の遺書』と『新版・きけわだつみのこえ』による歪曲
- 3 占領下における『旧版・きけわだつみのこえ』の改竄の放置
- 4 ジョン・モリスとの対話：佐々木八郎と中村徳郎

付属資料 佐々木八郎，1943年5月14日日記 解説復元 岡田裕之（以上，本号）

II 『新版・きけわだつみのこえ』（95年版）の欠陥——『旧版』から『新版』への編集典拠の転換（以下，次号）

- 1 はじめに——編集著作物『きけわだつみのこえ』と編集者「わだつみ会」と著作権者遺族
- 2 95年，『旧版』=『原版』を絶版とし『新版』を編集した経緯
- 3 『新版』編集の致命的欠陥
 - (1) 典拠の不足と凡例の虚偽，原遺稿と応募稿
 - (2) 「テキスト・クリティーク」と二次資料
- 4 『旧版』に“改竄”はなかった：筆写稿と渡辺「感想」の分析
- 5 おわりに——「わだつみ訴訟」と和解，99年8刷の実施，2001～02年の遺書展，03年『新版・第二集・きけわだつみのこえ』の典拠

I 佐々木八郎の思想

1949年日本戦没学生遺した手記（日記，手紙，詩歌など）から日本戦没学生手記編集委員会が編集し，東大協同組合出版部より刊行された『きけわだつみのこえ』は，刊行の直後から好評を博し，次年度のベスト・セラーとなった⁽¹⁾。この本はその後，東大出版会「東大新書」版，光文社「カッパ・ブックス」版などで長く読み継がれ，1982年には戦後生まれの日本思想の古典と認定されて岩波文庫に収められ，引き続き多数の読者に読まれてきた。岩波書店によればこの「岩波文

(1) 『2006年出版年鑑』参照。

庫」版は毎年同文庫売り上げ上位10位以内に入っている⁽²⁾。同文庫本は時代の人気によって売上げが左右されるベストセラー型の本ではないから、これは『きけ…』が一時の人気から独立に国民各層に広く深く読まれていることを示す。日本戦没学生は戦争中、最期にいたるまで学芸を愛し、人格の向上を目指して古典を読みふけていたのだから、自分たちの愛した岩波文庫に囚らずも自分の文章が遺され、読み継がれているのを知ったら、自分たちの死もまた無駄ではなかった、と慰められるかもしれない。

『きけ…』は、先の大戦——アジア・太平洋戦争1931-45年——の戦死者の記録であるが、それは学徒兵の単なる戦争被害の記録ではなく、「名誉ある勇者の戦死」の記録でもない。それは、戦争中すでに聖戦への疑問を隠すことなく、軍国主義に対する鋭い批判を記しながら、日本国民の一員としては国家＝民族共同体のために死なざるをえなかった青年の思想的苦悩の記録である⁽³⁾。戦没学生のこの苦悩こそ、この本、『きけ…』を“平和の訴え”たらしめ、戦後、日本国民が秘めていた平和への意思を鼓舞する戦後の古典たらしめたのであった。

だが、思想的記録といってもいずれも思想の形成過程にある未熟な青年の、公表を予定しない「私記」であるから、そこに思考を重ねた哲学者の重厚な思想体系を見いだすことはできないし、人生の苦楽を体験した宗教者の与える洞察と救済の衝撃を求めることはできない。戦争への批判と疑問も結局は戦没学生の「強制された死の受容」に至る苦悩が主題であるだけに、時勢と状況に「流されるままの」諦念が支配的で、状況にあくまでも抵抗する思想の強靭さに欠けるのは否めない⁽⁴⁾。こうして思想の自由恵まれ、徴兵の義務も「非国民」のレッテルの恐怖も経験したことのない現代の若者には「どうして拒否しなかったのか」と歯がゆいだけかもしれない。

自由主義や民主主義を明記し、国際主義を公表して敗北による日本の再生に期待した学徒兵たちですら特別攻撃に命を祖国に捧げた。しかしながら未熟ではあれ、学芸を志向し、家族や友人たちに敬愛され、将来を期待された優秀な青年たちを「死」に追いやった戦争を記し、自らの死を「受容」せざるをえない限界状況を刻むこの書は、戦没学生をその未熟さのままに、ありえた充実した生涯の像を思い浮かべさせながら、二度とあってはならない極限の思想状況を学ぶべき貴重な記録なのである。

戦没学生のこの苦悩こそ、戦争の大きな被害を体験して初めて“平和”の尊さを実感した国民が、占領による強制によってではなく、自らのうちに潜在していた意思によって平和の希求を表明する根拠の一つとなった。さらに、刊行された49年の時点において、この書はすでに始まっていた第三

(2) 岩波書店『図書』参照。

(3) 南原繁「戦没学生にささぐ」『はるかなる山河に』（東京大学協同組合出版部、1947年）冒頭、新書版、東大出版会、1989年。

(4) この『はるか…』と『きけ…』の二冊の戦没学生の手記は、刊行当時「失われなかった人間性の記録」「軍国主義に対する批判」などの積極的評価とともに、つまりは人間性を失って惨めに戦死した学徒兵の「非人間性の記録」とか「意気地なしの記録」とか否定的な反響もあった。

次大戦の危機（冷戦）に対抗すべき思想的根拠を与え、翌年の50年には知識人・学生・遺族を中心に「日本戦没学生記念会」が設立され直ちに朝鮮戦争反対、徴兵反対の運動を展開した。『きけ…』はこうして当初は学生平和運動を、現在では市民平和運動を推進する思想的古典となっている⁽⁵⁾。アジア・太平洋戦争に由来する平和運動は「わだつみ運動」だけではないけれども、運動が思想上の典拠をもつのはこの運動だけであろう。運動はすでに世紀を越えて続いている。古典に基づく平和運動はすでに日本思想史上からも格別な出来事である⁽⁶⁾。

1 日本戦没学生の思想の研究：大貫『桜』から『精神誌』へ

最近、日本戦没学生の思想像について二冊の研究書が続いて刊行された。いずれもアメリカ、ウイスコンシン大学教授、大貫恵美子氏によるもので『きけ…』収録の戦没学生を主体に、それぞれの『個人遺稿集』を素材にして、彼らの思想ないし西欧風の教養と戦死の苦悩を分析している。そのはじめの本は『ねじ曲げられた桜』岩波書店、2004年（以下『桜』と略記）、であり、第二作は『学徒兵の精神誌——「与えられた死」と「生」の探求——』岩波書店、2006年（以下『精神誌』と略記）である。前著は著者の専門領域である人類学に属する研究で、桜という日本人の特に愛好する花樹が軍国主義の象徴として利用されたのを日本史に即して説明したもので、先にシカゴ大学出版部から刊行された本の邦訳である。学徒兵の思想はこの例証にあげられているが、彼らの西欧文献の読書や教養と戦死の矛盾を“桜”という軍国主義の象徴を媒介に説明している⁽⁷⁾。

したがって戦没学生——私は「戦没学生」の表現を使用するが、「学生」を強調するか「兵」を

(5) 49年版『きけ…』の後記である小田切秀雄『『日本戦没学生の手記』に付して』は、朝鮮戦争直前の緊迫した状況をよく伝えている。

(6) 近代日本平和運動の先駆は1889年創立の北村透谷らの「日本平和会」である。これは翌年活動を終える。ついで日露戦争に際して、キリスト教の立場からの内村鑑三、社会主義の立場からの片山潜らが反戦を掲げ、第二次大戦時中は少数の良心的兵役拒否者（キリスト教起源）が抵抗した。いずれも世界的な思想の影響を受けたものである。主題を<平和>に限れば日本思想から生まれた運動組織としては、わだつみ会は独自のものである。

(7) 『桜』の原題は、E. Ohnuki-Tierney, *Kamikaze, Cherry Blossoms and Nationalism——The Militarization of Aesthetics in Japanese History*, U. Chicago P. 2002, 『精神誌』の原題は、Do., *Kamikaze Diaries——Reflections of Japanese Student Soldiers*, do., 2006, である。アメリカでは9. 11同時テロ事件により日本の特別攻撃に関心が高く、以前からカミカゼ=狂信国家主義者という偏見が根強い。『きけわだつみのこえ』, M. Yamanouchi, J. L. Quinn, (tr), *Listen to the Voices from The Sea*, U. Scranton P. 2000, 『はるかなる山河に』, Do. (tr), *In the Faraway Mountains and Rivers*, do., 2005, を共訳した山内みどり氏は、こうした偏見をなくすために翻訳を思い立った。N. Wydenbruckによる『きけ…』の英訳（抄訳）の表題は *The Sun Goes Down, Last Letters from Japanese Suiside-Pilots and Soldiers*, William Kimber, 1956, 『日は落ち行く』で、表紙は特別攻撃機の突入のデザインであった。この英抄訳はJ. Lartéguyの仏抄訳、*Ces voix qui nous viennent de la mer, lettres recueillies*, Gallimard, 1954, からの重訳である。ラルテギは『きけ…』を平和の訴えと理解し、これを戦後の日本青年の「バイブル」と評価して翻訳した。独訳、K-E. Heinemann, *Sturm der Götter, Limes* 1956, も抄訳だが仏訳とは独立のものである。翻訳の表題からすると「神風（特別攻撃）」を主題にしているようだが、学徒兵の西欧的教養に焦点をあてている。

強調するかで「(戦没) 学徒兵」と意味は変わらない——の思想研究としては次著『精神誌』の方が本格的なもので、著者の専門領域からは離れている。前著で論じた学徒兵は5名、佐々木八郎、林尹夫(非特攻隊員)、中尾武徳、和田稔、林市造であり、林尹夫をのぞいてすべて『きけ…』の戦没学生であり、次著『精神誌』が論じる学徒兵では、和田が除かれ、『第二集・きけわだつみのこえ』の宅島(宅嶋)徳光、松永茂雄・松永龍樹の兄弟が入って7名になっている⁽⁸⁾。

大貫氏のこの二著はいずれも真摯なもので、『きけ…』に深く関わる私にとって歓迎すべき研究であった。とくに『桜』は指摘されれば当然であるにしても“敷島の大和ごころ”が「散る桜、残る桜も散る桜」となり、挙句に靖国の社に花と咲く、となると罪のない桜、花見の桜が日本人の美的感覚に訴えて軍国主義に利用されたことは間違いない。この書は象徴人類学の研究としては十分に成功していると判断できる。平和への志向からも著者のよき意図は明瞭である。だが率直に言って『きけ…』に文章を遺したほどの戦没学生がこの桜=象徴に動かされて戦死を受容した、とは到底思えない。これはむしろ職業軍人や勤労者兵士に適用できるのではないか⁽⁹⁾。学徒兵はここでは適切な例にはならない。

『桜』は学徒兵の第一に佐々木八郎を掲げその思想像を追究する。佐々木はその思想からして『きけ…』のもっとも重要な人物の一人であり、膨大な原遺稿が遺族によって大切に保存されており、現在はその大部分が日本戦没学生記念会に寄託され、「わだつみのこえ記念館」での公開を待っている。私は佐々木の六年後に旧制高校、大学の同じコースを進み親近感を持っただけではなく、経済学の徒としてマルクス『資本論』を読みふける佐々木像を尊敬してやまなかった。また佐々木の1943年11月10日、学徒出陣の直前にクラス会で発表した文章「“愛”と“戦”と“死”——宮沢賢治作『鳥の北斗七星』に関連して」はその国籍を超えた人間愛の普遍性を説いた名文であり、人口に膾炙し、多くの人が論じている⁽¹⁰⁾。

『桜』においては、佐々木の思想の矛盾、その理想主義と戦死の受容の苦悩、葛藤は彼がマルクス主義者ないしは社会主義者であって、敗戦後の「社会主義日本」を期待してその理想のために「ソクラテスのごとき死」を選んだところにある、とされている。ソクラテスは死刑を課したアテナイを批判しつつ祖国アテナイを愛するがゆえに逃亡を拒絶して自らの死を受容した。佐々木もまた自分の戦死が祖国の再生をもたらすと信じ、期待した。佐々木が求めた「新しきエトス」とは反

(8) 注目すべき個人遺稿集にはかに、田辺利宏『夜の春雷』1968年、柳田陽一『学道記』1943年、中村徳郎『天皇陛下の為のためなり』1986年、上原良司『ああ祖国よ、恋人よ』1985年、池田浩平『運命と摂理』1968年、『岩ヶ谷治禄日記』1990年、太田慶一『太田伍長の戦中日記』1940年、『太田慶一遺稿集』1940年、『渡辺直己全集』1994年、『竹内浩三全作品集：日本が見えない』2001年などがある。

(9) 『きけ…』の学徒兵で「戦死と散る桜」に感慨を記したのは大塚晟夫だけであろう。『新版』365頁。ただし海軍飛行予備学生第14期会編『あゝ同期の桜』1966年、では文字通り桜が戦死の象徴となっている。

(10) この文章(エッセイ、朗読)は『はるか…』の冒頭を飾った。戦没学生手記はここから始まったともいえる。古くは、市原豊太「鳥の大尉の祈り」『わだつみのこえに答える』東京大学協同組合出版部、1950年、所収、新しくは、L. Horneの英訳本2000年の書評“*Impressions on Writings of Hachiro Sasaki, A reflection on Kenji Miyazawa's Karasu no Hokuto Shichisei* (祖国愛と人類愛の統合,邦訳略)”まで。

資本主義すなわち社会主義の原理だった、と大貫氏は理解した⁽¹¹⁾。しかしながらこの分析は、大貫氏が依存した唯一の資料である藤代編『青春の遺書』昭和出版、1981年に由来したものである。この本は編者藤代氏が佐々木を「社会主義者」「国家社会主義者」「全体主義者」と規定し、その独断的な佐々木観に基づいて編集されていた⁽¹²⁾。

『青春の遺書』は佐々木八郎を著者と表示した原遺稿の忠実な復元であるかのように見えるが、実質は藤代肇（本名鈴木一郎）編『佐々木八郎遺稿抄』とあるべきところで、編者の佐々木像に基づいて著しく不正確に編集されたものである。八郎氏の遺族、令弟泰三氏によれば『青春の遺書』は泰三氏のドイツ留学中に出来上がってしまい、「直しようがないほど誤りだらけのしろもの」だった。私は2001年、02年大阪・京都・東京における遺書展において泰三氏より佐々木八郎遺稿の提供を受け、はじめて遺稿原文に接し、次いでわだつみ会に寄託を受けてから遺稿を精査し解読し、『青春の遺書』による歪曲ははなはだしく、原遺稿による訂正なしには佐々木八郎の正しい、個性的な思想像は得られないと確信するに至った。信念ある共産主義者ないしはマルクス主義者であれば敗戦後の「社会主義」なり「革命的敗北」を期待するから、特別攻撃に自発的に志願することはありえないし、矛盾していると評価されて当然だろう。佐々木の親友の一人大内力氏はマルクス主義を支持し、『きけ…』所収の1943年6月11日の日記から推察できるように「反動的任務で死ぬべきでない」と佐々木を説得している⁽¹³⁾。共産主義者たちは戦争への非協力を疑われて投獄されるか、転向を強いられて戦地に送り出されている⁽¹⁴⁾。

林尹夫と佐々木の二人は読書と勉学において共通するところが多く、マルクス主義に対する知識水準は高く、この国禁の思想への共感を隠さない。佐々木は太平洋戦争の開始当時から戦争に明確に反対しており、緒戦の勝利に熱狂する国民を冷笑している。佐々木は敗北による日本の再生（フェニックスのよみがえり）を期待していたが、それは「社会主義革命」を期待したからではなかった。佐々木はマルクス『資本論』を読みこなし、マルクスの経済学を高く評価し、社会主義ソ連の政策までそれなりの評価を惜しまない。「マルクスに至りほぼ完全に資本主義の機構は科学的に解明し尽くされた」と佐々木は言う。しかしだからと言って『資本論』を軸とする経済学の支持者がみなその信念において「マルクス主義者」「共産主義者」か、となるとそれは独断、予断にすぎない。当時の東大経済学部の教授、矢内原忠雄、大河内一男、大塚久雄氏など俊秀教授の多くは『資本論』を自分の学問の基軸の一つにしていたが、いずれもマルクス主義者ではなく、矢内原、

(11) 『桜』302-306頁。ソクラテスの死はプラトン『ソクラテスの弁明』『パイドン』にあまりにも有名である。河盛好蔵「試練の時」前掲『わだつみのこえに答える』所収。

(12) 「[八郎は……敗戦後に生まれる新しいものを求めていた]。その新しいものとは、資本主義ならざる、個人主義ならざる社会、つまり国家社会主義の、全体主義の社会なのだ。』『青春の遺書』藤代解説、437-438頁。『桜』では、大貫氏は編者のこの解説に従っている。『桜』302、508頁。

(13) 『新版』197-199頁。

(14) 佐々木の親友平沢秀雄氏（『新版』199-201頁）の実兄道雄氏（一高→経済学部、フィリピンで戦死）と東大時代青年共産同盟に属した同志だった千葉秀雄氏（二高→文学部）は41年「治安維持法」で逮捕され実刑3年、敗戦後宮城刑務所で釈放される。『千葉秀雄獄中日記・書簡・聞書』2000年。千葉氏は戦死をまぬかれ、執行猶予釈放の永田和生（八高→京大）は前線に送られインパールで戦病死した（『新版』299頁）。

大塚両氏は生涯のクリスチャンであり、大河内氏はリベラルな社会改良を志していた。だがそれぞれの教授はいずれも時勢に迎合せず、状況には批判的だったから当局には迫害され（矢内原教授は退職強制）、警戒された。佐々木もまた信念はマルクス主義とは別であり、その思想像も——したがってその矛盾も苦悩も——まったく別のものだった⁽¹⁵⁾。

泰三氏は以前から兄八郎が「マルクス主義者」であるかのような世間の誤解を解きたいと考えておられた。泰三氏は当時すでに旧制一高生で兄のよき話し相手だったし、兄がマルクスの経済学を学びながらその思想、その哲学には反対していたことをよく知っていたからである。泰三氏もまた文系志望であったが「自分は死ぬかもしれぬ、お前は理系に進学せよ」と後事を託されていた。だが、泰三氏は誤解の原因となった『きけ…（旧版、新版）』にしても『青春の遺書』にしても、編集者に歪曲する意図はなく兄八郎への敬意、善意は明らかなので抗議（批判）は控えておられた⁽¹⁶⁾。

ところが『桜』のように日米の権威ある出版社から刊行された文献によって八郎が「マルクス主義者」と認定され後世に記録されるとすれば訂正を求めざるをえない、ということから、泰三氏は『桜』の著者大貫氏に八郎の思想と『青春の遺書』の誤り＝独善を指摘し大貫氏に訂正を求めた。大貫氏はこれに応じて学徒兵の思想像を訂正することを含め『精神誌』を執筆したのである。この『精神誌』は人類学一般の業績であるよりは固有の日本戦没学生の思想研究であり、さらには戦争・平和研究、日本思想史研究上の業績である。

『新版・きけ…』はこの誤った佐々木像に立つ『青春の遺書』という二次資料を底本としており、しかも紙幅の関係でそれをさらに圧縮しているから『青春の遺書』における歪曲が誇張されてしまう。佐々木のマルクス主義への根底的な批判は『青春の遺書』でも全巻を通して読めば明瞭であるが、先の大内氏への反論を記した日の日記でも、佐々木は自説の「新しきエトス」を主張するため以下のように書いている。

「しかし歴史観についてはどうも大内氏の考えに賛成できない。エンゲルスの言う偉人観、個人の外に社会ありというような考え方、それには違いないが、だからといって個人と社会を全然別に考えることはできない。あれはマルクシストの窮余の妥協にすぎまい。彼等の論理からすれば個人と言うものは元来0〔ゼロ〕なのである。百歩を譲って仮に“生産力”によって歴史が個人をはなれて進行するとしても、個人は大内氏の言うように電車の中の間人でありアトムであるとしても、我々そのアトムの一粒子たるものは、アトムとしての生き方を研究して、アトムとしての義務に殉じなければウソだ。……」佐々木はここで人間をあたかも一物体（倫理ゼロの原子）のように扱い、

(15) マルクス主義イデオロギーを否定する代表的な『資本論』研究者は宇野弘蔵である。ノーベル賞のW. レオンチェフはマルクス批判者であるが『資本論』を歴史の事実の詳細な研究であると高く評価する。

(16) 泰三氏は、かねてから『新版・きけ…』の佐々木像には違和感を抱いていたが、批判は遠慮していた。しかし、編集責任を持つわだつみ会が『新版』を改訂するのなら大いに歓迎する、と書いている（2006年2月1日岡田宛手紙）。

個人を社会に解消するマルクス、エンゲルスのいわゆる唯物史観をきびしく斥けている⁽¹⁷⁾。これが『新版・きけ…』では「……どうしても大内氏の考えには賛成できない」から省略記号なしに「原文を飛ばして」「仮に“生産力”によって……」と直結している。「百歩を譲って」という強い表現が意識的に削られている。こうして「人間をゼロに扱うマルクス、エンゲルス批判」が佐々木の「新しきエトス」論の伏線であることが無視され、戦没学生思想像が歪曲される。こうした誤解をまねく編集は『新版』がすべて二次資料である『青春の遺書』に依存したことによる⁽¹⁸⁾。

『桜』の続巻である『精神誌』も佐々木を第一に取り上げるが、大貫氏はそこで佐々木を「マルクス主義者」「社会主義者」と扱った前著を根本的に改め、彼の死を「人道主義の理想の再生（フェニクス）」を願ったものとし、この理想主義は宮沢賢治やシュバイツァーの人道主義に由来する、と訂正した。これは大貫氏が佐々木泰三氏の助言（批判）を受けて誤りを率直に認め、『青春の遺書』を詳しく読み直した結果である。同時に『桜』のもつ軍国主義を扇動する役割はこれら学徒兵（7名）には機能しなかったとした。『精神誌』はすでに人類学的研究とは言い難く、私は『桜』の学徒兵の思想像を訂正する目的で書かれた独自の著作と判断している⁽¹⁹⁾。そして『精神誌』は戦没学生思想の研究としては前著より格段とすぐれており、学徒兵の読書、語学訓練、人格向上に向けての最期まで続けられる努力と戦死の運命の受容の狭間の苦しきは、「桜の象徴論」が外されているだけ林尹夫、中尾においてもよく再現されている⁽²⁰⁾。

2 “新しきエトス”とは何か。『青春の遺書』と『新版・きけわだつみのこえ』による歪曲

それでは、佐々木の理想とする「新しきエトスに導かれた再生日本」とは何か。

大貫氏は1943年5月14日の日記を佐々木の理想主義を明示する最も重要な部分と認定し、『精神誌』において繰り返し引用している。この「新しきエトス」とは宮沢賢治やシュバイツァーのそれであろうか。これは『青春の遺書』を読み込んででもわかりにくく、藤代編のこの日の日記からではまったく分からない⁽²¹⁾。それが人道主義的で資本主義の腐敗のない社会状態なのは間違いない。だがこの「新しきエトス」とは、簡潔に言えば、スミス『道徳感情論』に由来する「わが身を他者

(17) マルクスはその政治経済学の優れた達成にもかかわらず、プロレタリア独裁と唯物史観の哲学により、20世紀共産主義運動=政権のイデオロギーとなった。20世紀の哲学は、アレント（『全体主義の起源』1951年）やアドルノ（『否定弁証法』1966年）のように、帝国主義とともに共産主義・全体主義を否定する哲学でなければならなかった。

(18) 『桜』と『精神誌』の二冊に対する岡安茂祐氏の書評（わだつみ会機関紙『わだつみのこえ』第124号所収）は、『桜』から『精神誌』への論旨の変更について一言もない平面的なものである。しかも大貫氏によるこの間の修正には典拠とした佐々木の個人遺稿集『青春の遺書』における歪曲があり、会編集の『新版』がこの歪曲をさらに歪めている事実には口を閉ざす。無責任かつ能天気な書評である。

(19) 『精神誌』78-80, 88-89頁。大貫氏は泰三氏の説明で『青春の遺書』が研究の典拠たりえないことを理解し、私に43年5月14日の原遺稿の写しを請求してきた（2006年3月19日岡田宛手紙）。

(20) 『桜』第3章、第6章。

(21) 『青春の遺書』359-362頁、『精神誌』xi, 89頁。

において他者の幸福を思いやる心」あるいは「他者を愛する倫理」であり、封建社会から新しい社会（市民社会・資本主義社会）に移る時代の倫理である⁽²²⁾。この日の日記は佐々木の日記のなかで思想上最も注目すべき宣言的な部分である。ところが日記のこの内容の根幹、主題が『青春の遺書』において削除され無視されている。

この日の日記は通常の日のそれとは異なり、その日の出来事が主題ではなく、佐々木の学術論文の構想とも言うべき“小論文”をなしており、冒頭にドイツ語で「スミスへの回帰」と別枠（上部余白）に大きく記されている。つまり「スミスへの回帰」との趣旨を明瞭にした表題論文なのだ。藤代氏にドイツ語が読めない筈はないから、氏はこれを理解できなかったか、佐々木の思想像を友人の故にかえて「社会主義者」「全体主義者」と勝手に描いてしまい、自由貿易・市場すなわち資本主義を肯定的に説いたスミスを熱烈に支持する佐々木に混乱し、あげくにこれを否定したかったか、どちらかであろう。「全体主義」という表現は残しているから、編者による偏見が日記の「スミスのエトス」というこの最も重要な主題を否定したのである。

佐々木には戦前の旧制高校教育をうけた者の特徴として重要事項をドイツ語で表記する癖がある。冒頭に主題「スミスへの回帰」とあり、スミス倫理論を強調するところでは「スミスへ帰れと叫びたい」と興奮気味である。こうして佐々木の理想主義が大きくスミスに由来することを無視したので、大貫氏は『精神誌』において前著の誤りを根本から訂正できなかったが、これは氏のせいではなく『青春の遺書』がこの日の日記の肝心要の箇所を削除したためであった。

当日の日記全文は長文なので原文は付属資料で参照して欲しいが、論旨を要約すると以下のようなになるだろう。

- 1 資本主義はさまざまな矛盾を露呈してきたが、その機構はマルクス『資本論』によってほぼ解明された。しかしそれは労資対立と景気変動の時代の経済学であり、資本主義の全面的崩壊と国家と一体化しつつある資本主義の否定ともいえる経済の転換期の現段階にはこれは妥当しない。
- 2 経済のこの段階においては特に社会を構成する人間の行為を導く主体的価値判断（エトス）が重要になるが、観念論哲学も唯物論哲学もこれを説明できない。資本主義は自由競争・自

⁽²²⁾ 『道徳情操論』原著、A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments* (1759), 1861. 邦訳は戦後だが、戦中から日本では『道徳情操論』と呼ばれていた。現在の水田洋訳では『道徳感情論』岩波文庫、2003年、である。これはスミスの主著『国富論』と不可分の著作であり、自己利益本位の市場経済、商業社会が他者の利益・幸福を尊重する道徳感情と一体となって合理的に機能する市民社会を解明する。これは18世紀の思想だが、佐々木の「愛他」の倫理は、カントの快楽や愛から独立した道徳律を主体の格率とする倫理、和辻の人間社会の間柄の相互規範の倫理のいずれとも異なる。それはレビナス（『全体性と無限』1961年）の説く他者からの啓示を基準とする20世紀の倫理に接近している。

スミスの「愛他のエトス」を政府なり国家なりが全社会の利益を考慮して個人を保証する行動をとる時、佐々木は「全体主義」という表現を使っている。だが「全体主義」とは当時の意味でも現在の意味でも、通例ナチス・ドイツやソ連共産党の一方独裁制を示す術語である。だが佐々木はナチス・ドイツの全体主義やソ連の全体主義を嫌っていた（39年11月14日、42年1月25日、3月7日、日記など）。したがってここでは“全体主義”は「愛の世界」あるいは「世界国家の国際分業」を念頭においているもので、佐々木を「全体主義者」と規定するのは根本的に誤りである。

己責任・私有財産を諸原則とするので、そこでのエトス類型は「経済人」となる。ウェーバーの言う資本主義の倫理（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）はその初期のものだった。「経済人」という資本主義の精神は過去の遺物である。

- 3 社会的行為は人間の価値判断によって導かれるものであるから、マルクスの「科学的社会主義論」は誤りである。転換期のエトスはスミスに求められる。スミスは新しい時代の産声を聞いていた学者であり、個人主義ではなく他者の利益、他者の感情、社会全体の利益を慮るエトスを提起した（『道徳情操論』）。社会のために働くものの安全は社会全体が保証するところに新しいエトスがある。「全体主義」を唱えてもこのエトスなしには無意味だ。
- 4 すべての人の行為が人よよかれかしと願うものであれば……これが新しい時代を導くエトスである。こうした“愛の世界”はスミスの自由主義経済、世界国家の国際分業が実現されなかったように、完全なものとしては実現されないであろうが、我々は常にこの理想に近づかねばならない。

この小論文はこうして、宮沢賢治に寄せたコスモポリタンな人類普遍的な愛の精神の宣言と合体し、マルクス経済学への敬意と唯物史観の厳しい拒否と合致する。これは「人道主義」を、スミスのエトス論を介して経済思想史の観点から、学術的に基礎付けたものである。藤代氏はこの日記を「社会主義」「国家社会主義」「全体主義」の主張と理解したのだから、ぶちこわしであり、誤読である。大貫氏はこの原遺稿を知らなかったために『桜』の訂正も不十分なままに終わった。それは『青春の遺書』を資料としたのでは不可能である⁽²³⁾。

『新版・きけ…』は改版にあたり依拠すべきでない二次資料を典拠とし、かつ『青春の遺書』にはかろうじて残っていた「スミス」への言及さえ抹殺してしまった。戦没学生の本人の原遺稿（本旨）の二重の歪曲であり、戦没学生を冒瀆するものである。

たしかに佐々木のスミスのエトス論の理解が学術上正しいか否かは疑問が残る。スミスはつまりは私利利害に立つ市場経済の合理性を主張しているから（『国富論』）、これを「腐敗と対立のない社会を志向した倫理」とするのは理想主義に過ぎよう。しかし、スミスは『国富論』1776年、で各人の私利追求の経済行動が社会的分業を成立させ促進すると説く以前に、『道徳感情論』1759年、で市民社会は「他者の利益・感情・幸福」を相互に認め合う社会関係によって機能している、と述べていた。戦時中の日本において大河内一男『スミスとリスト』1943年、高島善哉『経済社会学の根本問題』1941年、の二人が、スミス『国富論』の私利追求（自利自愛）の合理性と『道徳情操論』の他者尊重（共感・愛他）の道徳性という市民社会における二原理の関係を研究していたのは先駆的なことだった⁽²⁴⁾。

佐々木のスミスのエトス論の学習は日記から裏付けられるが、私が『青春の遺書』の誤りを確信

(23) 筆者は06年3月来日した大貫氏に、43年5月14日佐々木日記原文（付属資料）を手交したが、氏には『道徳感情論』は専門外の知識だったようである。大貫氏は戦没学生の西欧風の教養、文学・哲学・古典学習には詳しいが、専門学部進学後の佐々木＝経済学、中尾＝政治学・法律学の学習の分析は『精神誌』に乏しい。

(24) 前掲、水田訳『道徳感情論』（下）、解説、464頁、参照。

し、「新しきエトス論」と「愛」と「戦」と「死」の不可分の関連を理解したのは、佐々木の研究論文「生産力と経済倫理」を読むことができたからである⁽²⁵⁾。これは学徒出陣の直前に書き上げたもので、彼の学問上の遺書とすべきものである⁽²⁶⁾。これは長文だし、学術論文の草稿なので全文を紹介するには別の場所を求めなければならない。この論文は1943年5月14日日記の小論文の骨子に照応しており、その後の研鑽によるウェーバーとスミスの学術的吟味を経て、自分独自の理想主義的見解を披瀝したものである。ただし論文は構想をそのまま述べた草稿なので粗筋を整えると――

“生産力”と“経済倫理”は相互に補完しあって特定の経済機構を作り上げる。プロテスタンティズムの倫理が資本主義を作り上げたように、新しい社会経済の発展は生産力とともに新しいエトスによって導かれねばならない。ここで唯物論（マルクス）のように「生産力が倫理を決定する」と言うことも、唯心論（ウェーバー）のように「倫理が生産力を決定する」と言うことも誤りである。古典学派・マルクスは労働価値説によって資本主義の機構を明らかにしたが、唯物史観は新しい時代の新しいエトスを説明できない。そのためには資本主義がこれから形成される転換期に経済倫理——他者を愛するという——を説いたスミスに帰らなければならない。人間は主体的な自由な意志を持っている。理想の社会経済はささやかであっても人間の主体的な努力によって始めて可能となる⁽²⁷⁾。

論文の結語は悲壮である。「未ダ普遍的世界結合Universalunionハ単ナルユートピアダ。……

(25) 「“生産力”と“経済倫理”の特殊研究」と題するこの論文は、現存する佐々木の8冊の経済学研究ノートの最後のXII部の表題である。従ってノートは12冊あったと推定できるが、現存のほかのノートは古典『資本論』などの要約、翻訳が主で、このノートXII部のみが佐々木の独自の見解ないしは構想を積極的に記している。「生産力と経済倫理の歴史的研究」は43年当時の大塚久雄ゼミナールの主題テーマで佐々木はこのゼミを選択した。草稿はA4横書き、1頁約千字、38枚のもので、頁打ちの1頁から2のABCDEF頁の7枚が構想、2（記号なし）頁、2のvii～xv頁の10枚が補遺、3～23頁がウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の自訳と要点整理から成る。補遺のxvi頁は欠けている（推定）。

(26) 42年旧制一高を卒業し3月東大経済学部に入學すると佐々木は猛然と経済学の勉強を開始する。スミス『国富論』、リカード『経済学と課税の原理』、マルクス『資本論』、ヒルファディング『金融資本論』とつぎつぎにノートを作って行く。因みに前掲ノートの第I部の題目は「スミス『国富論（原文）』、大河内『スミスとリスト』、高島『経済社会学』、波多野鼎『経済学説史、第一巻スミス』」である。これらのノートのほかに『スミスの貨幣論』と題した論文が遺っている。この論文は二冊で完成稿である。

彼は、みずから自由に選んだ経済学という学問上の義務と、国家から要請される軍人として戦場に赴く義務（組上の鯉）の二つの義務を果たすために、大学で勉強を許される限り経済学を達成すべく追い立てられていた。彼は「この二つの義務を二つながら果し得る様に最後の学園の一年を送りたい」と43年7月6日日記に記す。ノートからみて彼は『道徳情操論』原文には当たっておらず、高島氏の著書、大河内氏の著書から間接にスミスのエトス論を学習した。エトス論そのものはウェーバー原文とそれを紹介する大塚教授から学んだ。

(27) スミス『道徳感情論』と『国富論』をここまで理想主義的に読むのは学術上正確といいかねるが、佐々木はここで古典学派、マルクス派、限界効用学派、歴史学派の各学派を検討しスミスへ帰れとの結論に達する。＜スミスに帰れ＞とは＜プラトン、アリストテレスに帰れ＞の叫びと同じく＜経済学の原点に立ち帰れ＞という主張に他ならない。

我々ハ喜ンデ敵ヲ喰止メル役ヲ買フノdeal。我々ハムシロ、ドウニモナラナカッタ事、又、今ハドウニモナラナイ事、ソレヲ研究スル役deal。今ノ人ニハ嫌ワレル役ダ。実ハシカシソノドウニモナラナイ事ヲ認識シテドウニカスル事コソ我国ヲ救ウ道ナノdeal。……今ノ目前ノ急ヲ救ウ為ニ我々ハ敢テ口ヲ緘シ、又敢テ筆ヲ捨テ、劍ヲ取ルベキ時ナノダ。苦衷諒トセラレヨ」

「“愛”と“戦”と“死”の示す他者への愛、国籍を超えた普遍世界の理想と「生産力と経済倫理」あるいは43年5月14日の日記の示す“新しき倫理”とは、実質上同一のものである⁽²⁸⁾。しかし前者は旧制高校生同窓に向けた公開の＜宣言＞であり、後者は公開を予定しないでひそかに書き遺した＜学術論文の草稿＞である。自ら自由に選んだ学問上の義務と、国家から課せられた強制による義務と、この二つの義務をともに果たさんとする佐々木の思想像は、後者——学術論文草稿——を基礎に復元すべきである。

佐々木は、普遍世界の愛に基づく自分の経済学の構想が「目前」には実現されず、おそらく敗戦による日本の再生とともに実現されることを期待した。この構想は“世界国家の国際分業”と解すれば戦後の国際連合と自由貿易体制に近似的に実現されたとも言うるし、帝国を解体し経済の繁栄する平和国家に生きた戦後日本に実現された、とも言いえよう。ここにおいて戦没学生の思想は望みうる最高の水準に達していた⁽²⁹⁾。

3 占領下における『旧版・きけわだつみのこえ』の改竄の放置

佐々木八郎の手記における第二の重要な問題は、占領下検閲による原遺稿の改竄問題である。『旧版』の絶版と『新版』の刊行が『旧版』における上原稿の「改竄疑惑」を原因とするものであるだけに、95年『新版』編集においてまったく見落とされていた佐々木、高木手記の改竄こそが原遺稿に戻すべき本来の改竄問題であることは、いくら強調しても強調し足りないことはない。『新版』編集部は、後に見るように改竄疑惑を根拠のない上原稿に認めながら、実際に中村克郎氏が岩

⁽²⁸⁾ 佐々木は宮沢、シュバイツァー、ヒルティなどの仏教徒、キリスト教徒の信仰に基づく思想、言説に魅かれ、“神”や“愛”を求めるが、「マルクス」と同様に主義者にはならない。宗教的な、敬虔な人と言えるが、学徒兵の林市造、大井栄光などキリスト教信者とは異なる。論文を書き上げた佐々木はおなじ経済学部の井出洋と語るが、井出はマルクス主義者（戦後日本共産党員）だった。井出は出陣当時の東大経済学部の状況をつぎのように記す。

「軍国主義教授のはびこっていた当時の経済学部で、学問らしい学問をやるには、経済史の大塚ゼミナールか大河内ゼミナールしかないというのが当時の学生の間の評判だった。私は……『国富論』を高校時代に読んでいたので大河内先生の『スミスとリスト』を非常に関心を持って読んだ。……東条が学徒動員を決定し、10月21日神宮外苑で壮行会が行われたが、私は出ないで家で『資本論』のノートを作っていた。真理をつかんで、歴史の法則に確信をもって、兵隊になりたい、というのが私の気持だった。』『戦前戦後：大河内演習の二十五年』1979年、54-55頁。

⁽²⁹⁾ 満蒙生命線論を批判し、これに代わる活路を国際貿易に生きる小日本に求める構想を提唱したのは石橋湛山だった。戦後日本はこのコースを選び平和と繁栄を得て成功する。『石橋湛山評論集』岩波文庫、1984年、参照。佐々木のスミスのエトス論はこの先見の明に連なる。戦没学生では松永龍樹もほぼ同じ見解に立っていた。松永茂雄、松永龍樹『戦争・文学・愛』三省堂、1968年、118-123頁。

波文庫版『旧版』「あとがき」（『新版』所収、488-489頁）に明記しているように、『はるか…』には占領軍検閲があったにもかかわらず、この痕跡の探索もしなかった。こうして佐々木稿、高木稿の改竄はそのまま放置された。

佐々木稿における改竄は、有名な宮沢賢治の鳥の北斗七星に寄せたエッセイ「愛」と「戦」と「死」の中にあつた。このエッセイの内容は周知のところの説明を省く。問題の箇所はなかごろの「しかし僕の気持はもっとヒューマニスティックなもの、宮沢賢治の鳥と同じようなものなのだ。憎まないでいいものを憎みたくない、そんな気持なのだ。正直な所、軍の指導者たちの言う事は単なる民衆煽動の為の空念仏としてしか響かないのだ。」206頁、である。ここで「軍の指導者たちの言う事」は原遺稿では「暴米暴英撃滅とか、十億の民の解放とか言う事」となっている。謄写稿は原遺稿どおりだが、筆写稿（最終編集稿）では「暴米暴英…」のところに編集部の赤線削除が入り、それが「軍の指導者たちの言う事」と書き換えられている。これでは実際にはほとんど検閲の効果はなく、むしろ「暴米暴英撃滅とか、十億の民の解放とか」は佐々木の鋭い侵略戦争スローガンの批判である。占領軍としてはこれを反戦、反政府の言辭として評価すべきであつたのだが、「暴米暴英」が気に食わなかつたのだろう。占領軍の検閲とはレベルが低くこんな場合もあつたのだ⁽³⁰⁾。佐々木のこのエッセイは『はるか…』の冒頭にあつたものである。中村氏、別枝氏の米軍検閲の回想はいずれも『はるか…』のものであるから、これは佐々木のこの箇所をさすものであつたろう。46～47年の頃は占領軍の検閲は厳しく、吉田満『戦艦大和ノ最期』、原民喜『夏の花』などが発行禁止となり、東大協同組合出版部の企画でも『平和を我らに』が左翼的だと徹底的にやられた⁽³¹⁾。

49年『原版』刊行時には検閲はなかつた筈である。だから佐々木稿のこの改竄は『はるか…』の継続でおそらくそれをそのまま放置したのであろう。あるいは依然占領下ではあつたから自主検閲だったかもしれない。高木孜の場合では「ソ連兵来るの噂とぶ。駆逐艦興南入港の噂入る。」432頁、は、謄写稿では「ソ連兵来るの噂とぶ。ゲーペーウー潜入、駆逐艦興南入港の噂入る。」とあり、筆写稿で「ゲーペーウー潜入」が赤線で抹消されている。高木の原遺稿は失われている⁽³²⁾。

両者ともに原遺稿の改竄であるのはまちがいない。これは占領終了とともに50年代に訂正しておくべきだった。『新版』はこの二つの明瞭な改竄を放置し、継承した。

4 ジョン・モリスとの対話：佐々木八郎と中村徳郎

ジョン・モリスは、日本政府により38年、英語・英文学の教師として招かれ、42年日米交換船でイギリスに帰国し、帰国後BBC放送の日本語部長を務め、戦争後のイギリスの対日政策の作成に重

(30) 占領下、NHKの一高寮歌『ああ玉杯に…』の放送に際して「破邪の剣を抜き持ちて」の表現が好ましくないので「浜のくぬぎ（櫛）を抜き持ちて」と歌詞を変えたという実話（佐倉朔氏）がある。

(31) 『はるか…』にはCIE（民間情報教育局）の事前検閲があり、別枝達夫氏（東大協同組合）が原稿（筆写稿）を提出した。ただし氏は『はるか…』には赤線（削除、変更要求）は入らなかつた、と言う（座談会「占領時代と『わだつみのこえ』」『わだつみのこえ』第35号）。中村氏の証言および『きけ…』の筆写稿と異なる。

(32) 高木稿は『はるか…』検閲とは無関係である。それでもソ連は占領国の一員であつたから、自主検閲で「ゲーペーウー（秘密政治警察）」を抹消したのであろう。あるいは親ソ感覚で改竄したのか、わからない。

要な役割を果たした人物である⁽³³⁾。彼は一高の英語教師として『新版』の佐々木八郎と中村徳郎の二人の手記に登場する。とくに中村の44年6月20日付「最後の手紙」に記された師弟の会話、250頁、は感動的な光景である。この二人の戦没学生と敵国人（日米英開戦後）との交流は戦争と平和に深い意義を持つ記録であった。

ところが彼が佐々木の41年2月18日の日記に登場するところでは印象が薄く、二人の交流は記録されていない。『新版』を引用しよう。

「ジョン・モリスの講演を聴きに出る。ヒマラヤの天候、チベット高原の高気圧よりの風のこと、酸素技師のこと、気象学のこと、チベット族のこと、あるいは高所における人間の働き等、興味津津。彼等の山への情熱が徒に形而上的に走らず、極めて科学的である点、学ぶべき所が多かった。」193頁。

これは『青春の遺書』の丸写しだが、藤代氏は原文をどうしてこのように読むのだろうか⁽³⁴⁾。

原文はこうである。

「ジョン・モリスの講演を聴きに出る。ヒマラヤの天候、チベット高原の高気圧よりの風のこと、酸素ボンベの操作法のこと、高地気候への適応のこと、チベット族のこと、あるいは高所における人間の働き等、興味津津たり。また僕が早速彼に尋ねたことだったが、彼等の山そのものへの情熱が単に形而上学等に逃げずに、システムティックであり、科学研究を高所において行うこと等学ぶべきは実に多かった。」

この日の日記は前文をふくめ誤読が多く『新版』はでたらめに近い。なかんずく私が重視したいのは、佐々木はモリスに質問しているのであってただの聴衆ではない、ということである。中村と佐々木は友人同士なのだが、この二人は佐々木日記によれば同年5月29日、モリスを自宅に訪問している⁽³⁵⁾。戦争への批判と疑問を隠さない二人と敵国人（当時は開戦前だが）の交流は、帰国後のモリスの回想と行動を知るとき、少数ではあれ日本の学生が軍国主義に強く反対していた事実が、戦中にイギリスに伝えられていたことがわかる。これが戦後の対日政策に影響を及ぼしたかどうかまでは不明にしても、これは『きけ…』が記すべき国際連帯の微かな記録であるまいか。『新版』はどうしてこれを抹消したのか。モリスは回想する⁽³⁶⁾。

「私の経験から言えば軍部に批判的な若者は非常に多く…クラスの大半の生徒は軍事教練をサポートするためにあらゆる機会を探していましたし、訓練指導する将校に対しては常に消極的な反抗があり

(33) ヒュー・バイアス、内山秀夫、増田修代訳『敵国日本』刀水書房、2001年、200-203頁。

(34) 『青春の遺書』187頁。

(35) 二人は一高寮旅行部で一緒、のちにまた寄宿寮委員（食事部）で一緒になる。これは当時の若者同士の挿話だが、中村は部の先輩大内力氏ほかに対立、大内とも親友である佐々木は板ばさみとなる。『青春の遺書』は高校生物語として読めば面白い。41年8月、一高寮は「関東軍特種演習（関特演）」に際して上京した動員兵士の宿舎となるが、そのときの時計台を背景にした写真に二人は一緒に写っている。

(36) J. Morris, *Traveller from Tokyo*, The Book Club, 1945, 鈴木理恵子抄訳『ジョン・モリスの戦中ニッポン滞在記』小学館、1997年。

ました」⁽³⁷⁾。

こうした人間の連帯はいかにささやかでも国際連帯ならずとも平和への希望であり“芽”である。佐々木と中村は遺された手記からしても異なった性格の持主である。二人は古典を読む情熱に甲乙はないが、佐々木の勉強振りは桁はずれで、社会科学的であり、また宗教的であるが、中村は雄弁で理科生であるだけ文学、哲学に詳しく今日という文化人類学、文化地理学を目指す。佐々木は教練の成績も悪くないが、中村は教練をサボり幹部候補生の資格もない。しかし二人は一高旅行部で一緒に寄宿寮委員（食事部）も一緒だ⁽³⁸⁾。中村が42年10月兵隊にとられて習志野に入営すると「さびしかろう」と佐々木が見舞う⁽³⁹⁾。

『きけ…』の手記には孤独な日記、身内への手紙、伝言が多いが、佐々木のエッセイのように公開のものもあり、上原の「所感」のように従軍記者への自由主義者を公言しての手記もある。杉村裕は佐々木の戦死の報をうけて彼の遺稿「愛と戦と死」を読む（読み返す）のだが、この遺稿そのものは弟泰三に託してあるから、これは佐々木が「写し」を杉村に渡したのだろうか⁽⁴⁰⁾。佐々木と中村は死しても同じ本に友として並んでいる。（つづく）

付属資料

佐々木八郎 1943年5月14日日記 解読復元 岡田裕之

Rückkehr zu Adam Smith（スミスへの回帰）

一昨日から警戒警報が出ている。今日のニュースでは、アッツ島に有力な米陸軍が上陸、交戦中だとの事である。先日の警報はウエーキ島に上陸された為だったという。愈々敵が本腰を据えて来た様に思われる。先に独伊軍は何か言訳ばかりしながらアフリカを撤収したがその原因は最近急激に上昇して来た米英の生産力に基き戦車その他武器が豊富になった為だという事だ。愈々予期していた事が始まったのだ。勿論かかる状態を現実として受けとってそれに対処する事はそれとして、我々社会学者に課せられた道はもう一步先を見る事だと思う。

今迄資本主義は各種の矛盾を暴露しつつ進展をとげて来た。そしてその度にその矛盾の解決手段としての経済学が発展し、徐々に認識の歩を進めてマルクスに至り殆ど完全に資本主義の

(37) 同訳、243-245頁。ここでモリスの念頭に中村と佐々木があったことはたしかである。中村「最後の手紙」にある令弟克郎に渡しておいたモリス宛手紙、『新版』248-249頁、は、中立国経由で戦中のロンドンに届いていたであろうか。令弟はこの手紙を記憶していた。向田博「同書書評」『わだつみのこえ』第119号、126頁。

(38) 和田稔もまた寮委員（雑貨部）だった。和田稔『わだつみのこえ消えることなく』角川文庫、1972年、23頁。

(39) 佐々木は43年学徒出陣で海軍入団、中村は一高卒業、東大理学部地理学科入学だが、教練不合格で入学取り消しとなったのか、徴兵猶予期限（24歳）を超過したかで42年10月陸軍入隊となる。『青春の遺書』338頁、は中村を10月東大第二工学部入学とするが、誤りである。

(40) 『はるか…』192頁。『新版』351頁。杉村は武山海兵団から土浦、谷田部の海軍航空隊で佐々木と一緒にだった。このエッセイ現物は佐々木八郎より泰三氏に託され、現在は泰三氏から寄託されて「わだつみのこえ記念館」が保管している。

機構は科学的に解明し尽くされたのだと考えてよいと思う。ただマルクスの見た社会は資本主義の矛盾の一つたる労資の対立の盛な時代なのであった。そして以来マルクシズムの唱えられるのは多く景気変動に伴い労資の対立の激化された時代であった

然し、資本主義は幾度か景気変動の波を経て高度化し、遂に現在、その全面的な崩壊の過程に入らんとしているのである。従来の如き局部的の矛盾ではない。経済学は勿論現下の国防、戦時経済の運営の為に役立つものであるし、役立つねばならないものであるけれども、更にもう一歩先を知る事を要求されているのだ。勿論此れを知る事は決して“現在”に対して好影響を及ぼす事ではなく、たゞ“現在”に生きる人からは無理解な非難を受けねばならぬ運命に陥る事となるのではある。

以前労資の対立の時代に活躍した為にそしてそれが時期尚早であった為にマルクシズムは心外な不評判を受けている。そして超越的な批判の対象となっている。しかし我々はかかる批判を恐れずに我々の任務を果たさねばならないのだ。今や資本主義は全面的な崩壊の危機に直面しているのだという事をはっきりと知る必要があると思う。帝国主義から国家資本に移ってはもはや資本主義は量的のみでなく質的な変化をとげたと言わねばなるまい。国家資本は資本主義の高次の段階ではない。もはや資本主義の否定であると思う。そして今はこの転換期の真最中なのだ。経済学そのものが混乱を示し、乱世に生きる人々は好むと好まざるとに拘らずそのエトスの転換を要求されている。すべてその現れだと思う。この時代に当り経済学者たるもの何をなすべきかについて以下少しく、記して見たいと思う。

近頃の主体性を説く論者がよく言う事であるけれどもそして又統制経済論では殆どそういうのであるが、僕は自由主義時代の経済をただ率直に機械的な自然法則を唱えて人間の意志、意欲からはなれたものの様に考える事、或いは人間の存在論的構造を強調して、主体的なものを説き、これからの人間の在り方を教えるという事には非常な疑問をもっている。人間というものとは自然的超歴史的には本来生物学、生理学乃至心理学的範疇のものだと思う。そしてかかるものとして常に主体的な判断能力、行為能力を付与されているのである。かかるものとしての人間の認識の能力を観念論哲学、唯物論哲学が色々説明して来たのであるけれども、人間は客観的存在にお構いなしに創造するものでもなければ、機械的に純他律的に全く主体性なしに存在によって意識を規定されるものでもない。そのおかれた事態において客観的な存在を認識し、それを判断して行為に導く主体性は常に自然的な範疇として有しているものと思う。勿論それは単純に自然的な範疇ではなく、歴史的社会的に色づけられてはいるが、色を除いて考えればそうだと思う。この意味でハイデッガー、デイルタイ乃至ハルトマン、シェーラーを理解する事は出来ると思う。彼等の煩雑な術語を用いなくとも、これは哲学と自然科学との歩み寄りによってもっと簡単に判り易く言い得べき事ではあるけれども一応、人間の構造に関しては存在論のなした功績は認められてよいと思う。

ただかかる人間の構造は現在の人間のみでなく、又これは将来あるべき人間の姿でもなく、それは人間の本来のあり方であるという事は注意されねばならない。それが資本主義社会にあ

っては自由競争・自己責任・私有財産等の諸原則の故に、人のかかる構造においてなす行為には一定の形式が出来てしまったのである。即ち“経済人”がそれだ。資本主義を前提とした時、人は常に経済人である事によってのみ生活する事が出来る。すべて経済人によって生きんとした。経済人として有能な者が勝利者であった。国家もこの原則を免れなかった。

マックス・ウェーバーの言う資本主義のエトスとはやはりこれの初期的な形態であったのである。存在論的構造にあり、自然的範疇において主体性を有する人間も資本主義下にあってはその行為は一般的な形式を被らざるを得ず、従ってその行為は表面、自然科学的、機械的なものであったのである。本質は主体的であってもかかる人間のなす行為の集積は全体として、集団として見る時は又大数の法則により、一層自然法則的なものに見えたのであった。よって始[初]めて経済学という科学が、法則定立的科学が、成立する事を得たのであった。しかし表面は自然科学的範疇の如くでも本質は主体的なものなのである。これを見失ってはならないと思う。問題はここにある。

マルクスに至って資本主義の機構はすべて解明せられたと言った。然し、マルクスの全[出]発点は唯物論なのである。これは結局右にのべた如き資本主義下の人間を表面的皮相的に観察した為に陥った哲学上の誤謬なのであり、この意味ではマルクスと雖も遂に“時代の子”なのであったと僕は考える。唯物論に出発したマルクスは資本主義社会の解明には成功し、その動態把握にも大体において正しい所をついた。然しそれが崩壊して後新たな社会に入る事を説明する段に至っては蹉跎せざるをえなかったのである。この事は幾多のマルキスト自身が苦悶を感じ、カウツキー、トロツキーの対立にも見られた。科学的社会主義という事の自己撞着がそれである。真に科学的なら人の手は下さずともいい筈である。所がそうではない。人は本来、唯物的なものではなく、存在論的（一応は）なものなのであって、資本主義下に表面上唯物論的に見えたにすぎないものなのである。従って資本主義をはなれる段になると、もはや表面上唯物論的であった人間はその本来の姿を現して存在論的構造を見せる。主体的なものを見せる。資本主義のエトスはもはや過去の遺物と化してしまうのである。新しきエトスに導かれねばならぬ。自然科学的、法則実体的であった経済学は主体的政策的理論たる事を要求されるのである。問題はここだ。

ここで僕はZurück auf Adam Smith（アダム・スミスへ帰れ）を叫びたいのだ。スミスの観察した社会は未だ資本制ではなかった。幾多の封建的束縛を見、新しき時代の産声をそこここに聞いたスミスは新しき経済を導くべきエトスを『道徳情操論』において論じ、自然法的考え方に導かれてこれから作り出さるべき社会の理想を描いたのである。我々も今この転換期に当たり資本主義を導いたエトスに別れを告げ新しきエトスに導かれてこれから作り上げらるべき社会像を描く義務があるのだと思っている。

一例をあげよう。今我々の見せつけられている最も資本主義的なものの一つに保険業がある。保険こそ個人責任主義に基く個人の不安を除かんが為 [のものであるの] にこれ又営利主義、典型的営利主義に導かれて保険会社の営業が始められる事になっているものなのである。個人主義は資本主義のエトスである。新しきエトスは全体主義でなければならない。国家でもよい、

世界でもよい、社会全体の為に働く者の安全は社会全体が保証してやる所に新しい時代のエトスがあるのである。今は過渡期だから仕方がないけれども全体主義、全体主義と唱えてもかかる意識の生まれ出る客観的存在がなければならない。人は本来存在論的なものだと書いた。客観的存在を判断し、行為に導くけれどもその存在からひどくかけはなれたものを創造する力はないのである。指導者たるものの所謂被投的投企〔ハイデッガー『存在と時間』〕は被指導者より遠くへ達する筈である。被指導者をして進ましむる物的基礎を与える事に主体性の用いらるる場所があるのである。この意味で保険などは国営にすべきものの第一なのだと僕は考える。

働け働け、危険はすべて政府が国家が保証する。美しい事ではなからうか。すべての事象がこうなった時は世の中はどんなに美しい事だろう。誰も自分の事をケチケチ考える奴はいない。すべての人のすべての行為が皆、人よよかれかし、世よ、よかれかしと願うものであったとすれば、……。それこそが新しき時代を導くエトスである。それは前々から自分が臍氣に感じていた、人へ〔の〕、及び仕事を通じての人への、愛なのだ。愛の世界の実現される日は何時の事だろう。誰でもが自分の事を心配する必要のない社会を造りあげるのが我々の任務なのだ。その時代が確立された時は又新しきエトスが一般的になり、客観化されるであろう。ただ現在は転換期である為にそのエトスがはっきりしていないのだ。勿論かかる愛の世界（こういうと何だか甘いみたいだが……）もスミスの描いた自由主義の経済が実現されず、世界国家の国際分業が行われなかった様に種々の弊害の為に完全なものとしては実現されないであろう。ただ常に我々はこれに近づくべき義務を有している。

一応新しき時代のエトスに近いものが見られ、物的基礎が出来つつある今日、なおなお旧資本主義態制の遺物の所々に残存するのを見逃す事は出来ない。急には払拭できぬ程根強いその力が戦敗を通じて叩きつぶされる事でもあればかえってあるいは禍を転じて福となすものであるかもしれない。フェニックスの様に灰の中から立ち上がる新しいもの、我々は今それを求めている。

はや我々は“俎上の鯉”であるらしい。悲観している訳ではないが事実は認めねばならない。苦難の時代を越えて進まなければならぬ。

一度や二度敗けたって日本人の生き残る限り日本は滅びないのだ。